

あ あ 鳴呼、クラリネット

安部直文

(八十期)



高校入学の年（一九六四年）の九月、創立八十年の記念式典が挙行された（十日〜十三日）。

おそらく記念事業の一環

だったに違いないが、吹奏楽部に新品の楽器が整えられた。その中に、一本のクラリネットがあった。通常のクラリネットの四分の三ほどの長さで、E♭（イーフラット）と呼ばれる小クラリネットである。ピッコロが高音域を担当するフルート属であるのと同様に、E♭もクラリネット属の高音域を担う。

あるうことか、入部したばかりの私に、この一本があてがわれた。音が出ない、運指がままならない、楽譜が読めない、という三重苦を抱えた私は、克服のためのさしたる努力もせず吹奏楽部に所属し続けた。本校の吹奏楽部は、県内トップレベルの実力を誇っていた。創立八十年記念式典の直後（九月二十九日）に行われた第二回福島県吹奏楽コンクールの高等学校の部では、総合第一位だった。その二か月ほど前



筆者は前列左から3番目

に郡山市民会館で開催された第十四回福島県高等学校音楽学習発表会の写真が手許にあるが、前列左から三人目の私は、吹いているふりをしているに過ぎない。当時（今もそうかも知れないが）、E♭クラリネットがある吹奏楽部は珍

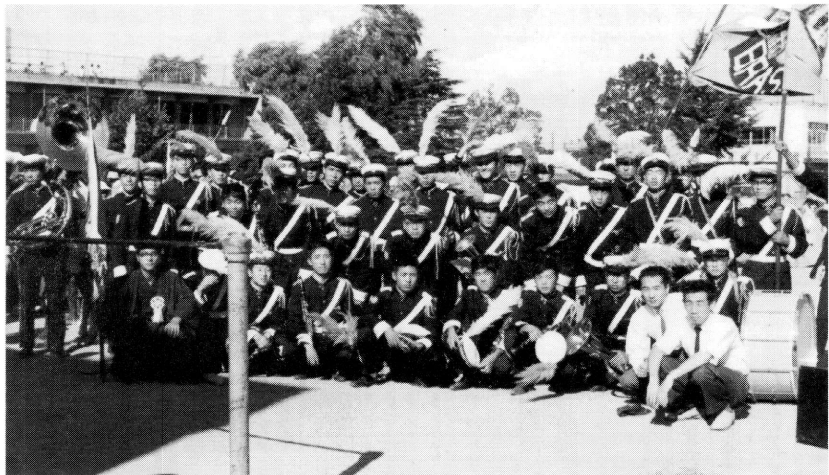
しかった。それだけに、何とかして早く吹きこなさなければ、という思いだけはついていたのだが……。

クラリネット部門に一人の先輩がいた。高橋弘二さんである（79期／写真の前列左端）。高橋さんは、自前で外国製のクラリネットを持っていた。学校貸出しのベークライト製品と、舶来の高級木製品とは、明らかに音質も音色も異なっていた。本校の吹奏楽部の演奏レベルを押し上げていたのは、高橋さんのクラリネットであるのは衆目が認めるところだった。その高橋さんに関して、二つの忘れ難い思い出がある。一つは、ジャズ・クラリネット奏者の藤家虹二のコンサートに誘われて郡山市民会館へ行ったこと。この時、高橋さんは日本有数の奏者の楽屋を訪ね、アドバイスを受けたと記憶している。そのひたむきなクラリネットへの思い、日頃の猛練習ぶりを見るにつけ、私にはとうてい真似ができないと諦めてしまったことが、E♭クラリネットをもののできなかった遠因だったかも知れない。

やがて高橋さんは音楽大学に進学したと、風の便りで知った。本校から音楽大学へ進学するのは稀であった。それから十年ほど経ったある日、新宿の路上で高橋さんとはったり出会った。

急いでいたようなので会釈を交わしたただけだったが、たしか「ピットイン」という有名なジャズ喫茶の近くで、店先の告知に演奏者としてその名前が書かれていたのを確かめた覚えがある。高校生時代からジャズ・クラリネット奏者としての夢を抱き、生き馬の目を抜く東京で、その道を着実に歩んでいる姿に圧倒され、感動した。この二つ目の思い出は、私の現在に至る職業選択に影響を及ぼしたといっても過言ではない。

本校の吹奏楽部に私が寄与した点があるとするれば、それは、『鉄腕アトム』の楽譜を入手したことだろう。当時、テレビで放映されていた主題歌を演奏したいので楽譜を送ってほしい、と番組提供の明治製菓に手紙で依頼したのは私だった。数日後、ガリ版刷りの楽譜が郵送されてきた。音楽著作権がやかましい今と違って、万事おらかな時代だった。その楽譜をパートごとに編曲し直したのが、春山和見部長と木本元治さん（いずれも78期）だったと記憶している。かくして、本校吹奏楽部の『鉄腕アトム』は、創立八十周年を祝う仮装パレードのメイン行進曲となった。学生服と帽子に飾りを付けた手作り衣装をまとった部員達は、パレードの先陣をきって学校正門を出て、麓山通りを経て終着の橘小学校まで行進をしたのである。

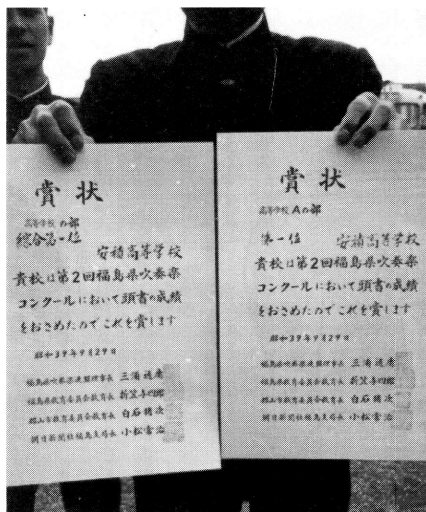


80周年記念の仮装行列のプラスバンド部 橘小学校校庭

あれから五十四年……。私は、偶然見つけた「クラリネット」というパブスナックに時折、出向くようになった。店内にはクラリネットが飾っており、それを目にするたびに何ごととも中途半端で終わった高校生時代をほろ苦く思い出

している。これからクラリネットの演奏に挑戦しようにも、齢のせいで口元がおぼつかなくなっているの、断念せざるをえないのが悔しい。

【著述家】



第2回福島県吹奏楽コンクール
（昭和39年9月29日）
高等学校の部 総合第一位
高等学校Aの部 第一位